‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

88号 1994.6.28
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE：狂乱 1994.6.12 代々木公園路上

photo by k.k.

雨で歩行者天国は中止になっていたが、雨がすこしおさまってきた２時過ぎから公園脇の歩道の上でライブがはじまった。“BURNING SPIRIT”という企画ライブで、狂乱の前にハード・コアのバンドが２バンドやった。２バンド目がやっているときにそこを通りかかった大柄なアメリカ人（だと思う）とバンドの関係の人（だと思う）が、なにが原因かわからないが、殴りあいをはじめた。そのアメリカ人の仲間や止めにはいった人たちでケンカになり、モニターが倒されたりしてライブが一時中断した。騒ぎはすぐにおさまったが、あたりに尖った雰囲気がただよった。
そのバンドが終わって、セッティングのあと、狂乱のライブになった。
歌がはじまったとたん、あたりの尖った雰囲気も日常性も一瞬で消えた。時間が止まった。
コリン・ウィルソンが「至高体験」で「ある体験が強烈で忘れがたいものであるとすれば、それは私たちがその体験に投入するものの成分によるのである」と書いているが、そうだとすると、今年の１月16日に狂乱のライブを初めて見たときの体験が強烈だったのは、私がそれだけの成分を投入したからということになる。その成分というのはそれまでの自分の全生涯にちがいない。あれからまだ５カ月しか経たないのに一人生を生きたくらい長く感じるのは、それからの狂乱のライブ（特に３月29日とこの日の２回）を、やはり全生涯をかけて聴いたからなのだろう。狂乱のライブには聴く者の全生涯を「現在」という一点に収斂させる力がある。そして、それはきっと演奏する側も「現在」に全生涯をかけてやっているからにちがいない。

「（狂乱の）十二日のステージ興味深かったです。特徴があるといいますよりも、風格があるといいましょうか。いままでよそに例のみられないバンドではないでしょうか。ハード・コアといいます類型とはちがったサウンドですし、詞もえびのように暗喩を極めるということでもありません。マニアックスの『バンクは短いからなあ』という言葉が気になりますが、ファンの多少はべつにしまして、新しいサウンドとしまして興味深い思いです」――滝川久さんの手紙から。
（滝川さんは「原宿サンダー通りホコ天ローラーサウンドムーブメント」の編者で、現在も原宿歩行者天国で取材活動を続けていられる方。えびもマニアックスも原宿歩行者天国で活動をしていたバンド）

POEM：「血反吐」より「有象無象」「革命の日」

有象無象

側頭葉に張りつくその響きこそこのあたし
我に返る　肝に銘じる
身に憶えのない妙な代物
合わない焦点　ついて廻る
この世に吹き溜まる数多の代物共
浪費される　使い捨てられる
多くの物は片端から消去され
遺された物さえ無駄に終わる
指令が下る　斯くて記憶は吹き返され
あたしは辛うじて遂行する

革命の日

形成、崩壊へまっしぐら
工事現場では老朽が進められ
おっちゃんの労力　水の泡
独自性は損なわれ　ネタ切れの有様
最先端は時代錯誤で
愛と平和と勝手にしやがれ
幾度となく十二の数が巻き戻され
一からやり直し　同じことの繰り返し
確実に向かってる　報われる日
弥勒菩薩降臨
遂に訪れる　時代の合致
アバンギャルド見参
第一級警報発令さる　第一級警報発令さる

WORDS：町田町蔵

柳英里との対談より　シティーロード６月号

柳：でも、歌う時はどうですか。自分で書いたものを歌うじゃないですか。その時に感情が甦るんですか？
町田：あのね、歌うのはオリジナルに近い。“その場”で台詞を変えるんですよ。書かれたもんていうのは、もうある種死んだ、ただ文字を固定させたメモみたいなもので、それに声という魂をふきこむためには、もういちいちテキスト気にしてたらダメ。ただ、やっぱり何か一曲引っぱっていく力は無いとね。
柳：それは、理想的ですよね、今思ってることを今声にできたら。芝居も、最小限の役っていうのを理解してれば、何をやってもいいかなぁっていうのは、私もありますね。

SHORT STORY：「パスポート」

ラジヲ・N

シド・ヴィシャスなんてみんな好きだよ。
シド・ヴィシャスぐらい誰も聞いただろう。

俺は、蛾のような奴だ。夜になると徘徊する。耳障りな雑音と、暗闇の螢光灯が大好きだ。ここには、そんな虫けら共がたくさん集まっている。紫外線を放って虫を集め、電流で焼き殺す街灯みたいだ。あれはなんていう装置なんだろう。
俺は今夜その装置の中で、歌を歌う。
「ねばならない」的な衝動で、俺は歌を歌っている。どちらかといえば、表現と言いたいところだけれど、歌っていることには変わりないのでそういうことにしておこう。
ああ、気分は最悪だ。全ての感情が尖っている。まるで、歪な刺を持ちながら常に変形しているバクテリアみたいだ。それが、俺の感受だ。すべての物事に「アンチ」がついてしまう。それを人はパンクだという。そして、俺は再び最悪になる。
でもその最悪はごく稀に逆転することがある。それは、矛先をほんの少しずらしただけで訪れる。そんなときはまるで、正道に戻ったみたいにすべての物事が実にスムーズに運んでしまう。ああ、こうすれば良かったんだ。と実感するのだが、「こうすれば」というきっかけがどうだったのか分からない。彼女は「それがツキってやつよ。」と言う。

ああ、そろそろ始まるのか。最悪だな。
ステージはビールで水浸しだし、ホールは人のタンパク質の匂いが充満している。客は気味が悪いほどたくさん入って、ふて腐れた態度でステージに足を投げている。
俺は奴らに共鳴してもらおうなんてこれっぽっちも思っちゃいない。理解しようなんて前向きな態度のある奴が果たしてこの中にいたとしても、俺はそいつに主張しないだろう。
ドラムの奴がシンバルの位置を確認している。ああ、ノイズが苦痛だ。頭が痛い。喉が乾ききっている。
そして、俺は最悪を演じなければならない。一体どうしてこんなことをしているのだろう。
「あんたはパンクロッカーの神様になるんだから、ステージで死んだりしなくちゃいけないのよ。」
「やっぱりシド・ヴィシャスは死ぬべきだったんだ。」
彼女は簡単に口にする。くだらない。
それより俺にはどうしても手に入れたいものがある。
ここに来るほとんどの奴がもっているらしいものだ。
奴らはうんざりする現実を死にかけながら生きている代わりに、たとえ世界が終わっても消えることはないだろう。俺は、こんなところでくたばりたくはない。
俺は、思わず吐きそうになる。
そのパスポートを俺にもくれないか。

photo by k.k.